

めざす手段として、政府の教育再生会議は「9月」を提言した。どう考えるべきか。

大学の9月入学

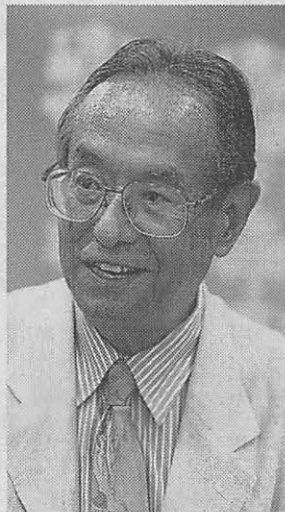
日本の大学と大学院は、世界のトップに立つべきだ。私は高等教育をテコ入れする一環として、「9月入学の大幅促進」を主張してきた。

現に、私も参加している政府の教育再生会議が、6月にまとめた第2次報告の中で「大幅促進」を提言した。これを受けて、07年の改革指針を示す「骨太の方針」に「4月入学の原則を弾力化」「全国立大で9月入学枠の設定を實現」などの文言が盛り込まれた。方針が閣議決定されたことの意味は非常に大きい。

なかじま
中嶋

みねお
嶺雄さん

国際教養大学長



36年生まれ。国際社会学者。東京外国語大学学長などをへて、04年から現職。政府の教育再生会議メンバー。

球を除くと、大半が秋に入学させる。日本もこの国際標準にあわせれば、留学生や研究者を送ったり、受け入れたりするのにムダがなくなり、世界との交流が劇的に増える。

私が狙うのは、入学時期の変更を突破口にした大学改革だ。たとえば、9月入学を導入するには、1年間を半期ごと

に完結させる「セメスター制(春秋2学期制)」を採る入れれば、刺激と競争が生ま

れ、質は高まる。世界2位の経済大国なのに、アジアの優秀な学生や研究者が素通りし、欧米に行ってしまう現状を変えようではないか。

9月入学シフトの第二の目的は、高校卒業から大学入学までの「猶予期間」を活用し

てもらうことだ。イギリスには「ギャップイヤー」という制度があり、大学入学を決めた学生が猶予を希望すれば、翌年秋までの1年余りを与えられ、専任活動や海外体験などに活用できる。

必要がある。世界の主要大学のように、学生の学力を「GPA」(評定平均値)という評価法で半期ごとに点検できれば、レジャーランド化を終わらせるきっかけにもなる。

また、世界の大学と単位交換ができるよう、カリキュラムを国際標準にあわせなくてはならない。各大学が世界から教員を公募して、英語による授業を増やすだろうし、日本に留学生を招く制度も、もっと便利に改善するだろう。

大学が世界の多様な若者を育て、刺激と競争が生ま

その次に、大学の半数を誘おうではないか。こぞって国際標準に転換すれば、世間の考え方も変わってくる。

国際標準は改革の突破口

教育再生会議は、9月まで

取り残される。

(聞き手・山本晴美)